九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「吉岡斉の仕事を考える」研究会報告書 表紙等

https://hdl.handle.net/2324/2543944

出版情報：「吉岡斉の仕事を考える」研究会報告書, 2019-01-20. 「吉岡斉の仕事を考える会」実行委員会
バージョン：
権利関係：

吉岡斉の仕事を考える―総括に代えて

綾部広則（早大理工）

多くの著作を世に問うのみならず、原子力を中心に実践的活動にもコミットしていた吉岡については、ある程度の人物像は掴むことができるかのように思える。とりわけ単行本のあとがきで、なぜこのような書物を書くに至ったのかについて詳しく説明することが多い吉岡の場合、それを読めば、吉岡の問題意識や考え方はおおよそ掴めるかのようである。

しかし、どのような人間でも書かれたものだけ見ていては窺い知ることのできない側面がある。吉岡ももちろんその一人である。そこで本稿では、シンポジウムでは触れることができなかった吉岡の側面について触れることで、発表された内容の行間を埋めることにしたい。

さて、その点で、まず想い出すのは吉岡の妻、やよいさんのことである。やよいさんは、1997 年の高速増殖炉懇談会に吉岡に随行してほぼすべての懇談会を傍聴するなど（詳しくは、吉岡斉・吉岡やよい「高速増殖炉懇談会とは何であったか」物理学者の社会的責任サーキュラー『科学・社会・人間』63 号、1998 年、6-18 ページを参照)、吉岡の同志ともいえる方だった。

しかしやよいさんは、吉岡さんと結婚してしばらくして病を得られた。吉岡の師匠の中山茂が語っていたように、これにより「吉岡は戦闘意欲をなくした」ようであった。しかもあまり症例のない、珍しい病気だったこともあり、やよいさんは福岡から東京に転居した。こうして吉岡は、福岡と東京の往復生活を始めることになる。もちろん、以前から東京で開催されるさまざまな会合に頻繁に出席していた吉岡にとって、福岡と東京の往復生活がどれだけ大きな苦痛であったかはわからない。だが、ファーストクラスで海外旅行が可能なまでマイレージがたまるほどの往復生活は、やはり吉岡の身体に大きな負担をかけたのではないかと思う。

ただし、やよいさんが病気になられたことで、この時期の吉岡には微妙な変化が現れた。医療問題に関心を寄せるようになったからである。実際、1999 年に刊行した中山茂・後藤邦夫・吉岡斉編『通史―日本の科学技術』（第 5 巻、学陽書房、1999 年）では、「生命と医療」のセクションのとりまとめを務めるとともに、自身でも 2 本の論考（「医療における市民革命と患者の権利」（867-880 ページ)、「ヒトゲノムの科学と技術の夜明け」（881-900 ページ)）を執筆している。さらに 2001 年には「人工透析技術に関する社会史的研究」で科研費（基盤研究 C）を獲得している。

もちろん、医療問題に関心を寄せたからといって、それまでのテーマを捨てて全面的に医療問題にシフトしたわけではない。そのことは、同じ『通史―日本の科学技術』（第 5 巻、学陽書房、1999 年）で、「冷戦時代の終焉と科学技術の転換」（39-95 ページ）という総説や「軍事・機微技術と日米関係」（157-177 ページ)、「原子力開発利用における成長時代の終焉」（244-265)、「原子力安全論争の展開」（292-318）からもわかる。

このように、依然として軸足は原子力や軍事といった国家体制と科学技術に関するテーマにあったものの、90 年代の吉岡は、医療問題に関心を拡げていたのであった。

ところが2000年代に入ると吉岡は再び国家体制と科学技術に関するテーマに注力するようになる。とりわけ吉岡が心血を注いだのが原子力に関する問題であった。そこでは周知のように、著作活動のみならず、政府の審議会の委員を引き受けるなど「批判的御用学者」あるいは「カウンター・テクノクラート」ぶりを遺憾なく発揮した。

なぜ吉岡は原子力の問題に注力したのか。色々考えられるが、やはり最大の理由は、2000年に高木仁三郎が逝去したことであろう。高木の死により吉岡は、「第二の高木仁三郎」（斗ケ沢秀俊「記者の目 科学者・高木仁三郎さんの業績」『毎日新聞』2000 年 10 月 17 日）をめざして、再び原子力の問題に注力していったのである。

ただし吉岡が選んだ第二の高木とは、高木のような「悲壮な決意にもとづく過酷な生き方」（吉岡斉「脱原発運動　高木仁三郎の死」『朝日新聞』夕刊、2000 年 10 月 31 日）をめざすことではなかった。

なぜ、そうした道を選ばなかったのか。一つ考えられるのは、原子力をとりまく状況が高木の時代と変化していたことであろう。別稿（『年報 科学・技術・社会』第 28 巻、2019 年、71-78 頁）でも述べたように、高木が活躍した時代は、原子力の問題を人々に理解してもらういわば啓発の時代であった。しかし吉岡が本格的に活躍する 2000 年代になると、原子力が多くの問題を抱えていることは人々にとっては、もはや自明の事柄となっていた。したがって、人々を啓発するよりも、むしろ、具体的にどうやって改革のシナリオを描くかを考えねばならない時期となっていた。それゆえ脱原発運動についても、それまでの意識は継承しつつも、新しいやり方を考える必要があった。こうした原子力をとりまく状況の変化を意識していたからこそ、高木とは違った生き方を選んだのではないか。

ともあれ、こうして吉岡は再び原子力の実践的活動に没頭していく。2009 年にやよいさんが逝去され、2011 年に東日本大震災・福島第一原発事故が起こってからは、原子力の吉岡という人物像が定着するほど没頭していく。その間に病魔は彼の体を確実に蝕んでいた。

以上に述べたことがらは、限られた資料と筆者が折につけ観察してきたことにもとづくものである。したがって、他の資料もあわせてより詳細に吟味する必要が残されている。これについては今後の課題としたい。